

日本留学の長期的成果～第三国に住むラテンアメリカ出身者の場合

名古屋大学国際教育交流センター

田 中 京 子

要旨：

日本での留学生受け入れの長期的成果の一端を、出身国でも日本でもない第三国で生活する元留学生への聞き取り調査を通して、留学生個人および日本、出身国社会、国際社会との関係から報告、考察した。ラテンアメリカを出身地とし留学から約10年～20年を経て、現在ヨーロッパまたは北アメリカに居住する元留学生等15名から調査への協力を得た。

留学による専門性の深化や人間の成長、自信や他者からの評価は一貫して成果として挙げられた。多くの場合、日本社会との直接の関係は薄れ、出身地域の社会状況などが関連して帰国もしていないが、それぞれの社会と様々な形で繋がっている。

元留学生たちの国際経験は留学後も進展し、現在では多文化の中で生活することが日常的になっている。彼らの中で、国や地域の枠、定住という概念が無くなりつつあり、留学成果は国境を越えて流動し、波及していると考えられる。

キーワード：

日本留学、長期的留学成果、元留学生、ラテンアメリカ、帰国生

目次：

1. 調査の背景と目的

2. 調査の概要

(1) 調査対象者 (2) 調査時期 (3) 調査場所

(4) 調査方法

3. 調査結果

(1) 職業と生活における長期的成果 (2) 留学成果の伝承 (3) 日本との関係 (4) 出身国との関係 (5) 国際社会との繋がり (6) まとめ

4. 考察

1. 調査の背景と目的

日本が留学生受け入れを強化し始めた1980年代から、滞日留学生数が10万人を超えた2000年代初頭にかけて、日本の留学政策は知的国際貢献と国家間友好促進が大きな目的とされ¹、留学生は修了後出身国に帰国して成果を出身国社会に還元することが前提とされていた²。出身国に戻った元留学生による社会への貢献等については、近年、評価が行なわれている³。

しかし実際には、帰国しなかったり一旦帰国した後再び出国したりして、日本や第三国で日本留学の成果を生かしている元留学生たちも多く存在する。筆者がこれまで調査してきたラテンアメリカ出身の元留学生の例では、ペルーの元日本留学生会の会員322名のうち、3分の1以上の116名が2006年時点でペルー以外の国に在住しており、国外滞在者の一部はその後移動を続けている⁴。国際社会でいわゆる頭脳流出の問題が取り上げられて久しいが、日本留学も、いわば「帰国しない留学生」を多く生みだし、将来有望な若者たちを様々な国や地域から減少させることに繋がっているのであろうか。

アジアの発展における日本の将来像を示すために2007年に発表された「アジア・ゲートウェイ構想」で

¹ 日本の留学政策の経緯については寺倉（2009）が全体像を簡潔にまとめている。

² 当時は、留学の施策や方針を説明する際に「渡日前から帰国後まで」というような表現が一般的に使われていた。（例えば文部省学術国際局留学生課1990, p.6.）

³ 佐藤由利子（2010）、有川（2011）等

⁴ 筆者が名簿をもとに電子メールで連絡したところ既に居住国が変わっている人や数年間に複数回引っ越した人たちが多数いた。

は、留学生受け入れ政策は国際的貢献としてよりも「国家戦略」として位置付けられ、優秀な外国人を「高度人材」として「獲得」し、日本社会に留め、活躍してもらうことによって日本社会を活性化することが強調されている⁵。「帰国しない留学」が、政策によっても後押しされることになったのである。この方針は日本、留学生の出身国や国際社会にどのような影響を与えていくのであろうか。

本調査は、日本で1980年代から盛んになってきた留学生受け入れの成果の一端を、留学後日本でも出身国でもない国で生活している元留学生に焦点をあて、留学生個人および日本、留学生の出身国、国際社会との関係から考察することを目的とする。それによって、留学が個人、社会に与える長期的⁶影響について知見が得られるとともに、頭脳流出の可能性や人材確保といった課題についても示唆を得ることができる⁷と考える。

2. 調査の概要

(1) 調査対象者

ラテンアメリカ出身留学生⁷で、留学終了後概ね10年以上を経て、現在北アメリカ、またはヨーロッパ⁸で生活している元留学生を対象とし、これまでの筆者の研究で得た情報等をもとに協力者を募った。協力申し出者すべてと面会することができなかったが、以下のように元留学生13名、および留学生の配偶者として日本に滞在した2名の協力を得た（本稿では調査対象者を「協力者」と表す）。

【協力者の属性】

・日本留学期間

1年～ 2年未満	2年～ 3年未満	3年～ 6年未満	6年以上
3名	2名	5名	5名

・留学中の専門分野等

理工系	文系	配偶者として滞在
10名	3名	2名

・取得学位等

研修修了	博士前期 課程修了	博士後期 課程修了	なし (配偶者)
3名	2名	8名	2名

・日本滞在年数

1年～ 2年未満	2年～ 3年未満	3年～ 6年未満	6年～ 10年未満	10年以上
1名	3名	4名	5名	2名

・留学後経過年数（面接時）

8年～ 10年未満	10年～ 15年未満	15年～ 20年未満	20年
3名	4名	6名	2名

・現在の主な職業

会社員	コンサル タント	家庭	学校教員 (常勤)	学校教員 (非常勤)	公務員
7名	3名	2名	1名	1名	1名

・出身国：チリ、ブラジル、ベネズエラ、ペルー、ホンジュラス、メキシコ（各国から1名～6名）⁸

・性別：女性8名、男性7名

・（留学時）単身：5名、配偶者と同居：8名、配偶者・子どもと同居：2名

（面接時）単身：3名（うち2名は留学後結婚し離婚）、配偶者・子どもと同居：12名

(2) 調査時期

2012年9月（ヨーロッパ）および2013年9月（北アメリカ）

(3) 調査場所

ヨーロッパ2カ国3都市、北アメリカ2カ国6都市。6名とは協力者の自宅で、8名とはホテルのラウンジ等で面会した。協力者の急用により1名とは面会できず、当該協力者には翌日、電話による聞き取り調査を行った。⁹

(4) 調査方法

半構造化面接、各人に1時間から2時間の聞き取り

⁵ アジア・ゲートウェイ戦略会議（2007）

⁶ 「長期的」（long-term）は例えばPaige et al.（2010）は6年以上としているが、本稿では、個人の進路が大きく変化したり次世代への影響が生まれたりし得る概ね10年以上を指すことにする。

⁷ 筆者はこの地域出身の留学生について文化適応や再適応の調査をし、調査結果は文末文献等に発表した。

⁸ これらの地域を選んだのは、名簿等の情報から、元留学生が一定数滞在していることがわかったからである。

⁹ 職場を指定する人はいなかった。（2007年から2009年まで、メキシコ、ペルー、アルゼンチンに帰国した元留学生42名に聞き取り調査を行なった時には、特に大学教員が職場での面接を希望した）。

調査をした。協力者の了解が得られた13件を録音し、後日文字化した。他の2件では調査者がメモをとった。2家庭でそれぞれ2泊する機会を得て、日常生活の一部に参加した。1名の協力者には、面接と別に職場を案内してもらった。面接の言語は協力者の希望により、主にスペイン語が13名¹⁰、主に日本語が2名であった¹¹。協力者には、筆者が勤務する大学ロゴ入りのペン等を謝礼として渡した。

面接の主な内容

- ・留学中および留学後の職業、生活概要（期間、場所、目的、専攻分野、など）
- ・留学がその後の職業や生活に与えた影響（専門性の活用、自己実現、アイデンティティーや価値観・行動の変化、その伝承、出身国や日本との関係、国際社会との関係など）
- ・今後の職業および生活の方向性と課題

3. 調査結果

録音を文字化した原稿と調査者のメモから、協力者別にキーワードと内容をカテゴリーに分けて一覧表にまとめ、それをもとに、適宜文字化原稿に戻って再考しながら、全体の結果を以下のようにまとめた¹²。

(1) 職業と生活における長期的成果

A. 専門性

どの協力者たちも、日本での研究経験を高く評価し、留学中深めた専門性を生かしながら、満足して生活していた。その状況には異なる程度と様相が見られた。

・専門が就職に直結した例：留学中に深めた専門性が高く評価されて就職に直結し、年月を経てさらに生かされているのは、当時日本で先進的に研究されていた分野（例えば地震工学やITソフト開発）を専門にして博士学位を取得した協力者たちだった。指導教員が国際的に著名な研究者であった場合に、元留学生の専門性も周りから評価され、特に最初の就職に有利だっ

た。さらに日本およびラテンアメリカという複文化の知識や体験は履歴にプラス要因となり、その後もよい条件で昇進や転職をした。多忙を極める生活の中で、持家を得て、子どもたちの教育環境を整え、経済的に余裕のある生活をしている様子であった。複数の協力者が、今も新たな仕事のオファーが頻繁¹³にあり、面接ではかなりの時間日本での経験について聞かれる、と語っていた。彼らは学会や講演などで日本を訪れる機会も持ってきた。

・専門が大きな成果には結びついていない例：日本留学の経験は高く評価するものの、専門分野の研究が大きな成果に結びついたとは感じていない協力者たちもいた。知識や経験の蓄積はしたが就職に直結するような技術を習得しなかった場合や、取得した博士学位が国際的にあまり認知されていない、または留学後子どもを持ち、育児に専念してきた場合である。日本での研修修了または学位取得の後、外国でさらに学位を取得して専門性をより高めたことで、生活や就職が好転し非常に満足している人たちもいた。一方、現在もさらに研鑽を積みながらよりよい生活を求めている人たちもいた。現在は家庭生活を優先している協力者たちも、いずれは専門分野に戻ることを希望していた。

・研究の副産物を仕事に生かしている例：専門分野の研究自体は成果として感じられないものの、研究の進め方や日本人との交渉術がこれまでの仕事に大いに役立ってきたという報告もあった。

B. 人間的成長

留学体験で育んだ価値観や人間的成長が、現在までの生活や職業に役立っていることは、すべての協力者たちが大きな成果として語ることであった。自己評価だけでなく、周りの人たちからの評価も高いと感じられていた。

ほとんどの協力者たちにとって、日本での留学生活に慣れるのは楽ではなかったようで、「死ぬほどつらい経験を越せば、人は強くなる」という諺や、「日本に適應できるなら世界中どこでも適應できる」というような表現が聞かれ、「日本の成功体験が自信になった」

¹⁰ 母語がポルトガル語の協力者を1人含む。家庭でスペイン語を常用していることや調査者の言語能力がポルトガル語よりスペイン語のほうが高いことから、スペイン語を選んだと思われる。

¹¹ 北アメリカでは特に、会話の中に英語の単語や表現が混じることが多々あった。

¹² データ整理は佐藤（2008）を参考に行なった。

¹³ 協力者の一人は週に2-3のオファーがあると語っていた。

という語りが多かった。一方、日本の生活はあまりたいへんでなかったと語った1名は、その理由を「自分の外見が白人でも黒人でもないミックス」であることと「自分のもとと働き者」であるため、と語っていた。この協力者は、容姿が異なる友人たちが社会に受け入れられず苦勞したり、休暇を大切にしている友人たちが休暇の取り難さを嘆いていた様子を見聞きしていたそうである。

留学中に育んだ価値観のうち現在まで大切にしているものとして特に語られたのが、「専念 *dedicacion*」「誠実さ *honestidad*」「尊敬 *respeto*」であり、「時間を守る *puntualidad*」や「規律 *disciplina*」も複数の協力者が挙げていた。特に仕事や研究への「専念」について、長時間にわたる研究体制に最初は驚いたが、土日・祝日や、夜中まで研究室仲間と一緒に過ごしたことが現在の仕事へ取り組みに繋がっていると語る人や、現在多くの同僚たちに見られる「目的を達成するための専念」と比較して、日本で「さらに成長するための専念」を身につけた、などと肯定的に語る人がほとんどであった。「誠実さ」の内容は、紛失した財布が出てきたとか野菜の無人販売に驚いたというような思い出と共に語られ、実体験が強く印象に残ったようだった。「尊敬」については、4名の協力者が日本やラテンアメリカにある年長者や地位の高い人への尊敬の念が、現在住んでいる地域では欠如していると感じ、自分たちは大切にしていきたいと語っていた。

もう一点、留学中に得られて現在に繋がる成果としてほとんどの協力者が挙げたのが「多様性」への理解、「国際的視野」であった。留学中に、日本だけでなく様々な国籍や異なる宗教の学生たちと共に過ごしたことは、彼らのその後の生活や職業に大きく影響したと言う。協力者たちの多くは自らを、出身地域である「ラテンアメリカ」、留学先である「アジア」、そして現在の生活と職業の場である「西欧」をよく知る「国際人」「グローバル人」と解釈し、周りからもその意味で高く評価されるということであった。

(2) 留学成果の伝承

協力者たちは、仕事の中でまたは生活の中で、日本での研究や生活の経験を伝える機会が多いと語っていた。一人の協力者は「自分たちは日本のよさを伝える大使」という言葉を使っていた。また、日本で培った前述の価値観（専念、誠実、尊敬、時間を守る）などは

職場でも生かしており、同僚たちから認知される場所であるという。子どもを持つ協力者たちは、子どもたちに日本留学の経験を頻りに話して聞かせ、特に他人への尊敬、集団への配慮、多文化への敬意といった価値観を伝えて実践を促していることが報告された。

ではその子どもたちを日本に留学させたいかと問うと、もし数年間の留学の機会があればさせたい、という協力者がほとんどであったが、あまり現実的には考えていないようであった。子どもたちは現在、居住地の言語や両親の母語を使いこなすが、いずれは日本語も学ばせたいという協力者もいた。

留学中子どもが日本で中学校まで就学し、現在既に成人している場合が1例あった。日本の教育に対する子ども自身の評価は、集団性、勉強や活動への専念などの理由から高く、自分に子どもができたならば、日本で教育を受けさせたいと希望しているとのことであった。協力者の次の世代からさらに、日本留学の影響が波及していく例もあることがわかった。

(3) 日本との関係

すべての協力者たちにとって、日本は人生の大切な一部と感じられているが、日本との繋がりの程度や様相には異なりがみられた。

日本との直接の関係として、学会など専門分野の関係で数年に一回日本を訪れる協力者が複数いた。彼らは意識して、日本からインターン生を受け入れたり、日本へ知識や技術を伝えたりしていた。しかしほとんどの協力者はこの10~20年、一回だけ日本を訪問した、または一度も訪問していない。その理由のひとつは経済的負担が大きいことだと言っていた。

留学時代の教員や同僚、友人たちとの連絡は、当時の教員や家主が既に亡くなっていたり非常に高齢だったりして連絡できない場合もあるが、ほとんどの協力者たちは、たまに(年に1回~3回)メールまたは電話しているとのことだった。しかし「日本に10年住んだ割に日本の友人は少ない」と語る協力者もあり、日本人の友人より、世界各地に住む留学当時の学生仲間たちと頻りに連絡し合っているという協力者が複数あった。

留学終了後日本で就職して1年から数年間働いた協力者が6名いた。勤務環境が必ずしも満足できるものでなかったり、日本以外の場所でよりよい仕事のオファーが来たり、または後進にポストを譲るよう促さ

れたりして、どの協力者も長年仕事をするには至らなかった。留学後一度別の場所で仕事をし、日本での大規模なイベントの際改めて来日して1年近く就業した協力者も2名いた。日本での就職活動はしたもの、面接の威圧的な雰囲気などを経験し、外国での就職を優先して選択した協力者もいた。

いずれにしても、今後機会があれば日本で数年間仕事をしたいという協力者は多かったが、その選択肢はどの協力者も現実的なものとは考えていなかった。その理由はほぼ一致しており、たとえ長年日本に住んでも、自分が社会の一員になることが難しい、それは自分の日本語能力が十分なレベルに至らないことが予測される、または自分や家族の容姿や文化背景が多数の日本人と異なっており常に外国人として扱われることが懸念される、ということであった。自らの経験からその判断に至った場合と、日本に長年住む先輩元留学生たちの経験を見聞きしてそう判断した場合とがあった。またそもそも、一か所で長年働き生活するということが自分が自分の進路の前提とはなっていない場合もあった¹⁴。

日本との間接的な関係として、すべての協力者たちが日本食や日本製品、あるいは日本の行事に対して、程度は異なるが愛着といえるような感情を持っていた。冷蔵庫を開ければ必ず海苔や納豆が入っている、家庭で頻繁に日本食を作る、誕生日の夕食は家族で日本食レストランへ行く、など食への思いが様々語られた。また、調査者が訪問した協力者の自宅には必ず、日本の工芸品や書道作品が飾られていたり、日本製シャンプーなど日用品が使われていたりした。子育てが一段落したため再び華道教室に通い始めた人、毎年の日本祭りに参加する人、日本庭園をよく訪れる人など、日本との関係が様々な形で保たれていた。仏教、ヨガ、鍼灸など、アジアのと捉えられているものへの愛着、それらに継続的に触れていることについて語る協力者もいた。

結婚してすぐの時期を日本で過ごした、または日本で結婚した夫婦にとっては、日本は家族生活の基点であり、1人の協力者は夫婦としての最初の「試練」だったと語っていた。子どもが小・中学校時代を日本で過ごした協力者は、現在は成人した子どもが、学術面で

は英語を、家庭ではスペイン語を使うが、感情面を一番よく表現できるのは日本語であると言っていた。日本で生まれた、または幼少時代を日本で過ごした子どもたちにとっては、日本は自分のいわばルーツとして大切にされている、と語る協力者も複数いた。

このように、日本との直接の関係は薄れた場合が多いとはいえ、間接的には様々な関係が続いており、愛着も感じられているのが窺えた。ある協力者は東日本大震災の1カ月後に予定されていた日本への出張を、放射能の不安から周りの人たちに止められたが、「自分の家に帰るのだから」と言って躊躇なく決行した。日本は、出身地や現在の居住地と共に、「自分の家」と感じているとのことだった。

(4) 出身国との関係

出身国との関係については、すべての協力者が、高齢の親や親戚が出身国に住んでおり、行き来したり頻繁に連絡をとったりしていた。

北アメリカからの場合には、ラテンアメリカと地理的に比較的近い時間的・経済的な負担も軽く、1年に1回～3回出身国を訪ねている場合が多い。ヨーロッパとラテンアメリカ間は、地理的には近くないものの、貨幣価値の違いもあって旅行の経済的負担が比較的少なく行き来しやすい。冬の寒さが厳しい地域に住む複数の協力者は、毎年冬休みに数週間、休みをとって子どもたちと出身地で過ごすと言っていた。

専門分野の講演会やセミナーを行なえる立場の複数の協力者たちは、一年に一回～数回は出身国の大学等を訪ねており、先進的な知識等を、母語を使って出身地域に伝えることに大きな意義を感じていた。それ以外の協力者たちも、いずれ出身国と連携して仕事を希望を持っていた。

子ども(年少から大人まで)を持つ協力者たちが一様に言うのが、子どもが祖父母や親戚との関係を保てるよう、意識的に出身地を訪れるということであった。子どもたちも父母の出身地へ行って親戚に会うのを楽しみにしている。ラテンアメリカで伝統的に価値が置かれている家族の暖かいつながり¹⁵は、協力者やその家族、子どもたちにとって生活の大切な要素になっているようであった。

¹⁴ しかし一方、日本で就職し長年就労している元留学生もあり、彼らへの聞き取り調査の結果は別途報告する。

¹⁵ 中川(1995:43)は、ラテンアメリカ社会に見られる家族や親しい友人と人間関係について、日本の一般的な家族関係に慣れた人からすると「家族のきずなの強さや家庭内での情感の深さは驚嘆に値する」と言っている。

しかし、ラテンアメリカの一部地域では現在、治安悪化が深刻だったり回復の途上にあたりするといふ。日常感じる治安が比較的よい日本や北アメリカ、ヨーロッパでの居住経験を持つ協力者たちにとっては尚更、治安が大きな不安材料となっており、9名の協力者が、出身国に戻って生活することは現在は考えられないと言っていた。そのうち1名は、自分の両親を出身国から出国させたい、そのために自分が経済的余裕を持てるようになりたいと語っていた。地域によっては、若い知識層の多くが外国に出ており、出身国にはあまり友人もいないという協力者もいた。また、特に子どもたちの文化適応の理由で現在の居住地にしばらくは住むことを考えているという協力者が2名あり、他の3名は出身国も含めて仕事の機会があればどこへでも行く気持ちがあるとのことだった。

(5) 国際社会との繋がりに

出身地である〇〇国の「ラテンアメリカ文化」と、留学先日本の「アジア文化」、そして現在居住する国の「西欧文化」という枠組で考えると、協力者たちは既に多文化を経験している。

一人の協力者は、日本で知り合った別の国籍の留学生と結婚し、留学後2人の子どもが別の国で生まれた。家族が皆異なる国を出身地としており、その家族にとって国の枠は意識されないものとなった。また、今後「よい仕事があれば北極へでも行く」という協力者、就職先候補として「例えばコロンビア、南アフリカ、スイスなど」と述べる協力者もあり、彼らが、自分の進路として一定の国や地域を意識していないことが窺われた。

現在暮らしている地域自体も国際都市であり、日常的に様々な国籍や言語、宗教の人々と接している。例えばアメリカの西海岸に住む協力者は「自分が〇〇人ということ意識しつつ、他の〇〇人や〇〇人たちなどと共にアメリカ社会の一員である」と感じているとのことだった。現在難民受け入れの仕事をしている協力者や、移民への言語教育に携わっている協力者、多国籍の子どもたちが通う学校で働く協力者もいた。ある協力者は、友人たちとの話題の多くは世界情勢に関するものだと語っていた。

協力者の一人は日本留学前に複数の国で生活した経験を持っていたが、他の協力者たちにとっては日本留学が最初の出身地以外での滞在経験であった。日本留

学から端を発したとも言える国際社会との繋がりは、共に過ごした多国籍学生たちとの関わりにも強く影響されて、その後の生活や仕事の中でより大きく発展した。すべての協力者たちにとって、多国籍多文化の中で生活し仕事をするのが、現在ではごく自然のことになっている。

(6) まとめ

ラテンアメリカ出身者で日本留学後8年から20年経過し、現在北アメリカまたはヨーロッパに住んでいる元留学生たちの留学長期的成果として、限定された人々への聞き取り調査ではあるが、次のような状況が見られた。

専門分野の研究成果については、分野や環境によって異なる様相がみられた。しかし日本留学を経験し人間として成長したことは、一様に成果として感じられており、留学後一貫して、自信や他者からの評価に繋がっている。

現在日本へ出張や訪問が頻繁にできる環境にいる少数の人以外は、日本との直接の関係は薄れているが、日本の生活、価値観、日本食や日本製品に対する愛着は持ち続け、周りの人々や次世代にも伝えている。多くの場合、今後日本で生活や仕事をしたり、子どもを留学させたりするのもよいと考えるものの、日本社会の構成員となるのは難しいと感じ、日本での長期滞在は現実的なこととしては考えていない。

出身国には家族や親戚が住んでおり、家族関係を大切に訪ね合っているが、治安の問題が深刻に感じられている地域の場合は特に、しばらくは戻ることを考えていない。知識や技術を伝えるなどの形で出身国に貢献しながら、いずれは戻りたい場所、または他の地域と同様、生活や仕事の場になり得る場所だと感じている。

現在は彼らの日常生活自体が国際的であり、国や地域の枠、定住という考え方が薄れている。日本留学に端を発した自国以外での生活、国際社会との繋がりは、元留学生たちの中でその後も強まり、現在はごく自然なことになっている。元留学生の子どもたちも、両親の母語と共に居住地の言語等、また場合によっては日本語も使い、多様な人々と積極的に暮らすことを、社会や親たちから多いに学んでいる。

4. 考察

調査結果から以下を考察し、今後の分析に繋げることとする。

日本留学後、出身国でも日本でもない場所で生活し仕事をする元日本留学生たちにとって、日本留学は人生の中の貴重な一幕であり、彼らは長期にわたって留学の影響を受けながら、現在の国際社会の中で生きている。留学の長期的成果を、出身国からの頭脳流出の可能性または出身国への知的貢献の観点から考えると、彼らが得た知識や経験は、10年、20年という期間で直接出身国に戻っていない場合もある。しかし、移動し続ける知識人たちの経験は、様々な形で間接的に、または次世代を通じて、出身国にも影響を与えていくと考えられる。元留学生たちと日本との直接の関係も、年月とともに薄れている場合が多い。しかし彼らの知識や経験は、様々な形で循環しており、間接的に日本にも影響を与えていると考えられる。

留学によって「頭脳」が「流出する」、あるいは「人材」を社会に「留める」という視点は、国の枠を固定的に捉え、知識や技術の出入りや一定の経済・社会への貢献に視点を置いた考え方である。島国である日本では特に、この捉え方が強く残っていると思われる。しかし現在社会では、域内統合やインターネットの普及にも象徴されるように、国や地域の繋がりが重層的、流動的になっており、これまでの観点が適用できない状況が広がっている。移動を繰り返し、国の枠を超えた意識や活動の場を持つ知識人たちが多くいることを考えると、出身国や留学先国を直接行き来せずとも、様々な方法で間接的に社会や人々と繋がり留学成果を波及させているという捉え方ができる。

一方、国策として今後日本に高度人材を確保していくとする場合、長期に渡って日本に居住する(元)留学生たちが社会の構成員として活躍できる環境を、いかに作っていくかが課題である。日本語を母語としない人、容姿が多くの日本人と異なる人、しかし日本社会で多くの価値観を共有する人々を、「外国人」としてではなく、社会の一員として組み入れ協働する体制や環境、共に新たな文化を創造していくという考え方を醸成するには何が必要であろうか。検討が必要である。

また社会全体を見れば、一定の地域の中で暮らし、紛争や貧困、治安の悪化に直面しても逃れることがで

きない人々が大多数である。この現実と、活躍し期待される元留学生たちとが長期的にどのように繋がっているのか、いけるのかについても検討したい。

引用文献

- アジア・ゲートウェイ戦略会議, 2007, 「アジア・ゲートウェイ構想」 < <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/asia/kousou.pdf> > (2014.4.14)
- 有川友子, 2011, 「20年後の「日本留学の意味」－インドネシア人大学教員の今を通して考える」, 『留学生交流・指導研究』 Volume 14, 国立大学留学生指導研究協議会
- 佐藤郁哉, 2008, 『質的データ分析法 原理・方法・実践』, 新曜社
- 佐藤由利子, 2010, 『日本の留学生政策の評価－人材養成, 友好促進, 経済効果の視点から』, 東信堂
- 田中京子, 2010, 「日本留学の長期的効果と波及－ラテンアメリカ出身留学生の場合－」, 『留学生交流・指導研究』 Vol. 12, 国立大学留学生指導研究協議会, 43-55頁, 2010年3月
- 寺倉憲一, 2009, 「我が国における留学生受け入れ政策－これまでの経緯と「留学生30面にン計画」の策定」, 『レファレンス』 No. 697, 国立国会図書館
- 中川文雄・三田千代子他, 1995, 『ラテンアメリカ 人と社会』, 新評論
- 文部省学術国際局留学生課「我が国の帰国留学生政策」, 『留学交流9』 Vol.2 no.9, 日本国際教育協会
- APEBEMO. 2006. *Directorio APEBEMO 1996-2005* (Lima: Asociacion Peruana de Becarios del Ministerio de Educacion del Japon).
- Paige et al. 2010, *Beyond Immediate Impact: Study Abroad for Global Engagement* (SAGE), University of Minnesota. <<http://www.calstate.edu/engage/documents/study-abroad-for-global-engagement.pdf>> (2014.1.4)
- Tanaka Kyoko, 1997, "Japan as seen from Latin American students in Japan", 『日本語・日本文化論集』 第5号, 名古屋大学留学生センター
- Tanaka Kyoko, 2000, "Reentry to Latin America: Prospects and Realities", 『留学生交流・指導研究』 Vol.3, 国立大学留学生指導研究協議会。
- Tanaka Kyoko, 2003, "Estudiantes Provenientes de Latinoamerica: Su adaptacion a la cultura japonesa y re-adaptacion a su propia cultura" (Students coming from Latin America: Their adaptation to the Japanese culture and re-adaptation to their own culture), *Inmigracion Latinoamericana en Japon*, Universidad de Nagoya.